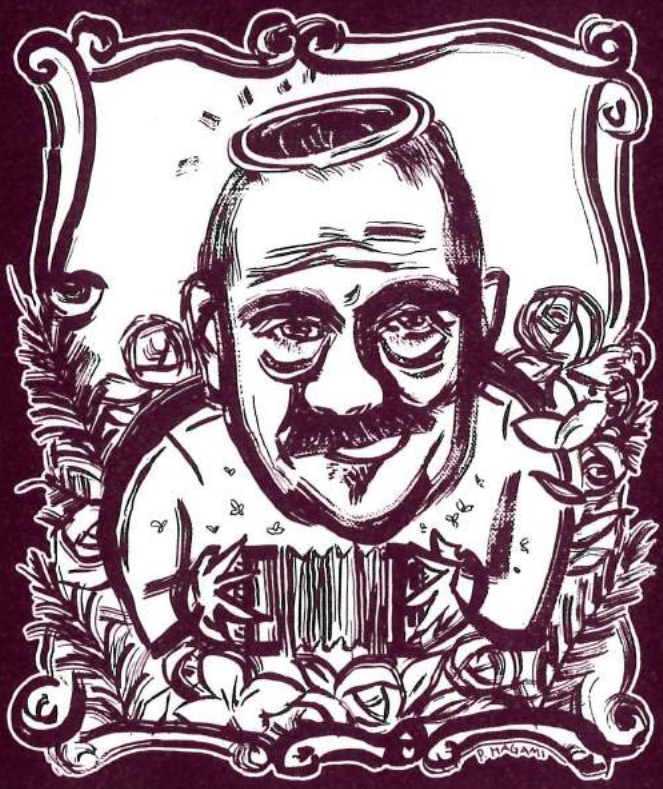
Tango Tango Tango

ピアソラのタンゴ

アルゼンチン・タンゴの巨星

アストル・ピアソラ追悼コンサート



ASTOR PIAZZOLLA

'93 9月29日(水)

共済ホール

主催 札幌ギター研究会
後援 アルゼンチン大使館
朝日新聞北海道支社
協賛 ハート音楽院

プログラム

アディオス・ノニーノ（ギター・デュオ：山口裕子 編曲）

タンゴ組曲（ギター・デュオ：オリジナル）

Ⅰ　アレグロ
Ⅱ　アンダンテ
Ⅲ　アレグロ

タンゴの歴史（フルート＆ギター：オリジナル）

Ⅰ　1900年の娼窟にて
Ⅱ　1930年のカフェーにて
Ⅲ　1960年のナイトクラブにて
Ⅳ　現代のコンサートホールにて

休　　憩

アストル・ピアソラ作品集

ブエノスアイレスの秋（五重奏）
ブエノスアイレスの夏（五重奏）
忘　　却（五重奏）
チキリン・デ・バチン（ヴォーカル＆四重奏：京谷弘司編曲）
ロコへのバラード（ヴォーカル＆四重奏）

タンゴ・ア・ラ・カルト

エルチョクロ（バンドネオン＆ピアノ：A・ピョンド作曲）
ノクトゥルナ（バンドネオン＆ピアノ：F・プラサ作曲）
荒城の月（五重奏：オマール・バレンテ編曲）
いつもブエノスアイレスで（五重奏：京谷弘司 作曲）

あいさつ

本日はご来場有難うございます。
はじめに自分のことで恐縮ながら、演奏活動２０年にあたる今年「何か風変わりなことをしてみたい…」と去年のうちから考え続けていました。又、２０年前頃には「４０才までギターを弾いていれたら〝上出来〟…」とも考えておりました。なぜなら、自分の能力不足は極力忘れることにしたとしても、演奏で収入を得ることは現在の何十倍も難しい状況でした。
ご案内をさしあげた方々には「…相変わらず〝メシ〟を喰えぬながら、（我が身は）ずいぶんと良い状況になりました…」と、率直な観想を書き添えました。２０年のあいだには、何度も気分がくさったりひょったりし、一・二度はギターを投げ出したこともありました。

しかし、この度のコンサートの準備を始めて「…やっぱりギターを弾いてて良かったなー…」と思うことしばしばです。

もちろんA・ピアソラが亡くなったことは悲しいことです。ほんの二つのギター作品しか演奏していなかったものの、我が身のみならずギターにとっても重要なレパートリーであることを確信していましたし、これからも多くの作品をギターに残してくれるもの……と思い込んでもおりましたから……。

我が身が〝良かったなー〟と思うのは、本当に多くの方々からご協力や励ましをいただいたり、ギターという楽器に耳目を向けていただけたことです。

ここ十年ほど、北海道のギターは…否、全国的な事のようですが…〝衰退〟の感きわめて強く、社会的な認識は薄れる一方です。札幌市の主催する「ギターマンドリン音楽祭」には、今年はたった5名の応募者しかありませんでした。

…尤も、我が身ごときが心配する必要なく盛んであったら、若いギタリストに押されて自分がギター弾きを引退せざるをえないかもしれませんが……。余談になりました。

さて、〝何か風変わりなこと〟が〝A・ピアソラ追悼コンサート〟になったのは「A・ピアソラ・ベスト」という一枚のCDを昨年暮れ知人からいただいたことに始まります。いただいたその日、夜中の〝お昼すぎ〟から数時間、涙がとまらずくり返し聴き続けざるを得ませんでした。それから数日間、呆けた様に聴き続けた末〝これしかナイ！〟と思ってしまったのです。…一切の責任は、その知人にあります！「…人は多くのことを知り、（…知らされて…）より苦悩を背負う」……誰がいったのでしたか…。

楽譜集めを始めました。今年1月頃のことです。出版されている……ときいていた楽譜まで、実は出版されていませんでした。一旦諦めかけていた時、「さっぽろライオン・ローレライ」の知人から、京谷弘司さんを紹介されました。幸運でした。

京谷さんに出演の快諾をいただき、編曲から後半のプログラムまで立てていただきました。

又、フルーティスト・西田直孝さんを紹介してくださり、共演のチャンスをつくっていただいたザ・ルーテルホールの荒井昭子さん、快諾していただいた本日の出演者の皆さんにも心から感謝します。

勿論、感謝すべきは聴きにきていただいた皆様へも、この〝しがねーぇギター弾き〟の企てたコンサートを紹介してくださった多くの方々へも同様であります。

とりわけ協賛の要請に、まじかなコンサートと海外公演を控えているにも関らわず応じていただいた季子幸夫先生はじめハート音楽院の皆さんには、お礼の申し様がありません。

どうぞ〝**風変わりな**〟コンサートをお楽しみいただけますよう。

平　佐　　修

出演者プロフィール

京　谷　弘　司（バンドネオン）

1965年早川真平とオルケスタ・ティピカ東京入団、ティピカ東京後期の第一バンドネオン奏者として長く活躍、その後ヌエボ・ポルテニアの新編成にともないそれに参加。菅原洋一、グラシェラ・スサーナと共に全国コンサートやレコーディング活動を行う。

1975年独立し、自身の三重奏団を編成、京谷弘司タンゴトリオとして全国のコンサート、ディナーショウ、レコーディングなどに活躍。藤沢嵐子、志賀清とモデルノス等のコンサートには欠かせない重要メンバー。

1985年4月から約3週間アルゼンチに渡り、自身の勉強と現地の状況視察、そして帰国後すぐ文化交流の一環として中国に招かれ、自身のタンゴトリオを率いて、北京・天津で計6回の公演を行い大好評を博す。

京谷の演奏はアルゼンチンの現代タンゴの巨匠アストル・ピアソラに「本場の水準をしのぐ」と絶賛され、その名はブエノスアイレスにも響いている。

1986・87年と来日したアルゼンチンの楽団、オルケスタ・ホセ・コランジェロに日本人の演奏家として唯ひとり特別参加。菅原洋一と共に全国のステージやディナーショウ等に共演。

現在バンドネオン・ソリスタとして、また自身の四重奏・五重奏を組んで多方面で活躍中。最近では、作曲・編曲にも意欲を燃やし、自作の「シェンプレ・ア・ブエノスアイレス」「回想」等はタンゴの魂を持っている曲と賞賛されている。

西　田　直　孝（フルート）

昭和17年、札幌市生まれ。桐朋学園大学入学。吉田雅夫・斉藤秀雄に師事。同校卒業後旧西ドイツ・フライブルク国立音楽大学入学。
オーレル・ニコレ教授に師事・在学中D・A・A・Dドイツ国家奨学金を受ける。
また、ロッテルダム・ガウデアムス国際現代音楽コンクール、ロワイアン国際現代音楽コンクール、ミュンヘン国際音楽コンクール等に入賞又は入選。
ソリストとしてダルムシュタット・グラーツ・ドナウェッシンゲン国際現代音楽祭に出演。
同校卒業後、イスラエル室内合奏団の首席奏者に迎えられる。２年間在団し退団、ヨーロッパにもどる。その後チューリッヒにてアンドョレ・ジョネ教授に師事。アーガウ州立教育大学の講師をへて帰国。パン現代音楽コンクール１位入賞、現在ソリストとして活動をしている。

湯　浅　輝　子（ヴォーカル）

16才より歌の勉強を始め、カンツォーネ・シャンソン歌手として札幌・東京を舞台に演奏活動をし、その後タンゴ・フォルクローレにと幅広く研鑽を積む。
現在、さっぽろライオン・ローレライ・ゾリステンのメンバーとして、また各種コンサート、ディナーショー等で活躍している。

石　原　ゆかり（ヴァイオリン）

函館市出身。

1974年　ＴＢＳの子供音楽コンクールの全国大会で第３位最優秀賞を受賞。
1975年　日本演奏者連盟コンセール・アミで奨励賞。
1976年　ＳＴＶ青少年コンクールで最優秀賞。
1977年　ＭＦＹ国際コンクールで最優秀賞を受賞し、翌年東京日比谷公会堂で新日本フィルと協演。
1981年　文化放送音楽賞で第２位入賞。
1982年　東京芸術大学別科弦楽専修課程修了。
1985年　札幌交響楽団に入団。
1986年　日演連新人演奏会にて札響と協演。
現　在　オーケストラ活動のかたわら札響のメンバーで結成された『カウニス弦楽四重奏団』の一員としても、室内楽、ソロ・リサイタル等各地で活躍している。
海野義雄、山下浩司、中村泉の各氏に師事。

淡　路　七穂子（ピアノ）

４才の時より母にピアノのレッスンを受け、桐朋学園大学付属子供のための音楽教室を経て、都立芸術高校に入学。
1978年、第32回全日本学生音楽コンクール（毎日新聞社主催）において東日本第２位に入賞する。1979年桐朋学園大学音楽学部ピアノ科に入学。在学中にドイツに留学し、マルグリスの講習を受ける。ピアノを三浦捷子、三浦浩、森安芳樹、多喜靖美、現代音楽理論を入野義郎、ジャズ理論、アレンジ法を貴峰啓之、ジャズピアノを坂元輝の各氏に師事。
1982年桐朋学園卒業後、ヴァイオリンとのデュオ、ピアノ・トリオ、ピアノ五重奏によるコンサート、そして室内楽演奏会などの演奏活動を行う。
1986年１月14日、朝日生命ホールにて岩瀬聡子氏と共にデビューリサイタル「ピアノデュオの夕べ」開催。演奏範囲は、クラシックはもとより、ポピュラー・ジャズスタンダード・

ウインナワルツ・タンゴ・ラテン等、広範囲にわたる。ピアノデュオ・ピアノトリオ・ピアノ五重奏等編成は多様で、現在京谷弘司タンゴデュオ、そしてカルテート・キンテートには欠くことのできないピアニストとして活躍中。
美しい音色、豊かな音楽性は特に高い評価を得ている。

林　　雄　一（コントラバス）

昭和７年 札幌市生まれ。
札幌市北高等学校卒業後、札幌音楽院にてコントラバスを長汐壽治氏に学ぶ。
昭和39年に札幌交響楽団に入団、平成４年２月に定年退団する。前・首席奏者。

あこるとギター・デュオ

1991年結成。ギターで演奏して効果的な作品であれば、ジャンルを問わず演奏してみたい……と思う気持ちの一致から生まれたギター・デュオ。
「あこると」の名前は、遠軽町在住の荒井のり子さんより頂戴する。Akkord（アコード）という和音を意味するドイツ語で、古い独・和辞書の発音表記である由。
結成以来、道内各地において数多くの演奏をしている。

佐　藤　洋　一

1956年紋別郡興部町生まれ。
1975年より1980年までクラシックギターを鈴木巌氏に師事。その間、1979年日本ギタリスト協会主催第10回新人賞選考演奏会に第１位入賞する。
1981年に渡独、旧西ドイツ・アーヘン国立音学大学に入学、佐々木忠教授のもとでクラシックギターを研鑽。1987年最高位の成績で卒業する。在学中、1982～1987年までベルギッシュ・グラッドバッハ市立音楽学校ギター科講師を勤める。
在独中旧西ドイツ国内やベルギー、ルクセンブルグなどで独奏や室内楽の演奏会を催した他、ヨーロッパ各地の夏季講習会などでマヌエル・バルエコ、アベル・カルレバーロ、ロベルト・オーセル、ホセルイス・ゴンサレス、ホルヘ・アリサ各氏に師事した。
1989年に帰国。札幌・江別でクラシックギターの指導をしている。
1989年リサイタルを行なった他、1988年より三井不動産札幌支店と喫茶「バロック」の協賛によるバロック・コンサートのシリーズ（道内外のギタリストによる独奏や室内楽）を1992年まで主宰。
現在「アコースティックギターシリーズ」を６回まで主宰、多岐にわたるギター音楽を紹介している他、独奏や室内楽等で年数十回のコンサート活動を続けている。

平　佐　　修

1948年軽川町（現・札幌市手稲町）生まれ。
15才の頃より独学でギターを始める。 '65年より大塚房喜氏に師事。 '67年より同氏の助手を６年間勤める。
'73年、協奏曲を含むプログラムでリサイタルを開催以来、７回のリサイタルを行なう。
'75年、在道ギタリストとして、初めて東京でソロ・リサイタルを行なう。同年、「ギターと室内楽の夕」と題して、コンサートをＳＴＶラジオで放送される。
'82年、アメリカ・ロサンゼルス市に於いてオリジナル作品を含むプログラムで一週間公演。 '86年、細川順二氏（現Ｎ響フルート奏者）とのデュオ・コンサートを開催。 '88年には、札幌交響楽団第290回定期演奏会にエキストラ出演もしている。
'91年、佐藤洋一氏と「あこるとギター・デュオ」を結成。 '92年、演出家・鈴木喜三夫氏との「ジョイント・コンサート」を開始。その他、 '76年より「バロック・コンサート」と題してサロンコンサートを始め、30回まで主宰。

現在、全15回の予定で「ギター室内楽シリーズ」を12回まで終了。
ソロ、デュオ、伴奏、室内楽など演奏活動の幅は広い。また、ポップスや音楽以外のジャンルとの関わりも大きく、アレンジ・オリジナル作品も多い。
【主なオリジナル作品】
「よだかの星」（宮沢賢治作）1981年、朗読とギター演奏/「火山灰地」（久保栄作）
1982年、ナレーション部分抜粋の朗読とギター演奏/「汽車に乗って」
1991年、ギターデュオ/「幻想曲 木霊・KODAMA」 同年、尺八とギター/「童唄による KIRAKU」 同年、尺八とギター、ギターデュオ編曲/「大きな木」
1992年、人形劇とギターデュオ＋ティンホイッスル（鈴木喜三夫氏とのジョイント第一作、ピアノ連弾に佐藤洋一氏と共編）/「うぬぼれうさぎ」同年、人間劇々中曲（歌）

アストル・ピアソラのこと

アストル・ピアソラが脳溢血で倒れたことを、私に教えてくれたのは、ギタリストの福田進一氏だった。彼はその日札幌で行われたコンサートで、ピアソラの「ブエノスアイレスの春」と「ブエノスアイレスの夏」を演奏したのだが、演奏後の「打ち上げ」の席で、ピアソラが倒れたことと、経過が良くなくて植物人間状態であるというようなことを、私達に教えてくれたのだった。そして、それからほぼ2年後の1992年の7月5日にブエノスアイレスの病院で死去したとのニュースを新聞で見ることになる。

1921年3月11日にアルゼンチンのマル・デル・プラタに生まれた彼は、フルネームを、Astor Pantaleon Piazzolla Manetti といい、イタリア系移民の子である。3歳の時に父母とニューヨークに移住し、15歳の時まで、彼はニューヨークで育った。タンゴ好きだった彼の父は、8歳の誕生日に中古のバンドネオンを贈り、ピアソラはアンドレス・ダキラに初歩を学んだ。13歳の時には、本格的に音楽を志し、ベラ・ウィルダにピアノと楽典を学び始め、この年、名歌手カルロス・ガルデルの知遇を受けてガルデルの映画「想いの届く日」に端役で出演した。1936年にピアソラの一家はアルゼンチンの故郷に帰り、仲間達とタンゴの5重奏団を結成。1938年にはブエノスアイレスに移り住み、ミゲル・カロ、フランシスコ・ラウロの楽団に参加したのち、アニバル・トロイトのもとでバンドネオン奏者、編曲家として活躍し始めた。

1940年代になり、アルゼンチンの代表的な作曲家アルベルト・ヒナステラに師事。この時期に「弦楽とハープのための組曲」「ブエノスアイレス狂詩曲」「交響的三章：ブエノスアイレス」などを作曲。作風はポピュラーで、タンゴをあまり意識したものではなく、どちらかというとクラシック音楽を意識していた。1950年代になり、「パラ・ルシールセ」「トリウンファル」「ロ・ケ・ベンドラ」などの一連のタンゴを発表し、従来のタンゴの形を破った「モダンタンゴの鬼才」として注目されるようになった。

1954年には、パリに留学。ナディア・ブーランジェに師事したが、彼女の言葉により、「タンゴの作曲家」としてやっていくことを決意。しかし、ピアソラのタンゴは、保守層には受け入れられず、全く新しいピアソラ独自の音楽として歩み始める。1960年代に入り、主として5重奏団を組んで活動。60～70年にかけて「ブエノスアイレスの四季」「デカリシモ」「天使のタンゴ」など、彼の名作が生まれている。

ピアソラの音楽的な位置づけについて、音楽評論家の濱田滋郎氏は、「ピアソラの音楽がタンゴであるか否か…。そんな設問は、それが素晴らしく高度で独創的な音楽であるという事実の前には、まったく次元の低いものに思えた。大切なのは『高踏的な音楽』と『大衆的な音楽』の垣根を真に取り払うことのできた、稀な音楽家に属していることである」とのべているが、この言葉に私もまったく同感である。

本日のコンサートは、本来、ピアソラの作曲した「ギターを含んだ作品を中心に」行われる予定であったが、残念なことに出版されている作品が少なく、後半でタンゴのオリジナル曲も演奏することになったそうである。そのことにより、アルゼンチン・タンゴの中でピアソラの占める位置がより明確になるものと考えたい。

（玉置 義弘）

演奏曲目について

アディオス・ノニーノ

音楽家としてスランプに陥った1958年から1960年まで、ピアソラはニューヨークに移り住んでいたが、1959年に最愛の父を失い、その悲しみの中からこの名曲は生まれた。ノニーノとは、彼の父親の愛称で、この曲は父親に捧げた鎮魂曲といえるかもしれない。

タンゴ組曲

1980年代に入って、ピアソラは盛んにギターのためにオリジナルの曲を書き始めた。ロベルト・オウセル、アサド兄弟など若手の優れたギタリスト達と会い知り合った結果なのだが、この1983年に作曲されたタンゴ組曲は、ブラジルの天才的ギターデュオ・アサド兄弟に献呈され、いまではギターの二重奏曲の定番となっています。

タンゴの歴史

このフルートとギターのために書かれた曲は、アルゼンチン・タンゴの歴史的な歩みを４つの時代的区分によって現している。「1900年の娼窟にて」「1930年のカフェにて」「1960年のナイトクラブにて」「現代のコンサートホールにて」と題された４つの楽章はそれぞれタンゴが、その時代にどこで育っていったかをあらわしており、1900年前後のタンゴの創成期には、ギターとフルートはタンゴには欠かせない楽器であった。このこともピアソラは、しっかりとこのモダンな曲の中にもおさえています。

ブエノスアイレスの秋、夏

最初から､「四季」としては構想されていなかったが、1965年に劇音楽として作曲された「ブエノスアイレスの夏」が大ヒット。勢いで一気に春、秋、冬が作曲された。ダイナミックな動きと中間の気怠い感じで夏をみごとに表現し、全体がロマンチックなタンゴのリズムの中にも秋が感じられます。

忘　却（オブリヴィオン）

1984年に制作された映画「エンリーコ４世」の為に作曲された音楽です。作詞者はフランスに住むアメリカ人のデービット・マクニール。彼の作品をイヴ・モンタンが盛んに取り上げ最近注目されているが、この気怠いアンニュイを感じさせる曲の内容は、終わってしまった恋を追憶しながら、終わった恋は忘れましょうと歌います。

チキリン・デ・バチン

1968年にもスランプに陥っていたピアソラは、詩と歌と音楽とよるオペレッタ「ブエノスアイレスのマリア」を、詩人オラシオ・フェレールと共同で制作。興業的には大成功とは言えないまでも、高い評価を受け、再出発のきっかけになりました。その後もフェレールとの作業は続き、1970年に作曲されたこの歌曲もフェレールの詩による美しいワルツですが､「夜になれば、ブルージーンズの小天使の汚れた顔がバチンの料理屋のテーブルを巡って、薔薇を売り歩く」とピアソラのタンゴに劣らず前衛的？な内容です。

ロコへのバラード

やはりフェレールとのコンビによる曲で、1969年の大ヒットです。この曲によりピアソラの名前はポピュラーになり、世界的にも広く知られるようになりました。別宇宙から愛を運んできたロコ（狂った男）への賛歌。現代人には情熱の狂気が必要なのだと訴え、絶叫します。最初「ブエノスアイレスのマリア」で歌ったアメリータ・バルタールが歌いミリオンセラーになりましたが、その後多くの歌手に歌われています。